



亀っ子だより

第53号

— 亀崎小学校 校長通信 — 2022年3月22日

令和3年度 卒業式式辞

亀崎小学校の桜の開花が待たれる季節となりました。

108名の6年生の皆さん、卒業おめでとう。

卒業証書を手渡ししながら、皆さんの足跡をあれこれ思い浮かべていました。新型コロナウイルスに翻弄される2年間で見せた、皆さんのリーダーとしての姿。制限の多い状況の中でも、学校を潤いのある場所にしてくれた優しいお兄さん・お姉さんとしての姿。学校の中心となり、下級生の良きお手本として、明るく仲の良い亀崎小学校を築き上げてくれました。中でも強く印象に残っているのは、「Try」を合い言葉にした野外活動、「Change」を合い言葉にした修学旅行を自らの力で作り上げていった姿です。一人一人が何かの実行委員となり、生き生きと活動する皆さんの姿から自主・自立の精神を感じました。担任の先生はもちろん、付き添った先生たち皆、感動していました。皆さんの姿は、校訓の「正しく、強く、美しく」を象徴するものとして私の心に深く刻み込まれています。本当にありがとうございます。

さて、6年生の皆さんが目標として掲げたのは「初心」「躍進」「感謝」という言葉でした。その中の「感謝」についてお話しします。「感謝」という言葉をオリンピックに出場した選手がよく使っていたと感じているのは私だけではないと思います。「感謝」という言葉には、相手にしてもらったことで強く心が動き、その気持ちを言葉で相手に伝えるという意味があります。その言葉の代表的なものが「ありがとう」です。そして、「感謝」の言葉を口にするすることで、人は心の安定が得られるのだそうです。オリンピック選手が、よく「感謝」の言葉を口にしていてのは、試合前後の過度な緊張から解き放たれ、心の安定を得るためであったのかもしれませんが、いずれにせよ、笑顔で「感謝」の言葉を口にすると、自分や周りの心を和ませ、幸せな気持ちになります。だから、皆さんの人生が実り多きものであるためにこれからも「感謝」という言葉を大切にしてほしいと願っています。

そこで、巣立ち行く皆さんへのはなむけとして、私が思う、皆さんに忘れてほしくない感謝を三つお話しします。

一つ目は「ものへの感謝」です。私たちの今の生活は、身のまわりにあるものによって成り立っています。身のまわりの自然にも、食べ物にも、教科書やノート、鉛筆一本にも感謝の気持ちをもち、大切にしてほしいと思っています。

二つめは「周りの人への感謝」です。人は、一人では生きていけません。皆さんが進もうとしている世界は、変化の激しい世界です。その中をたくましくしなやかに生き抜いていくためには、周りの人への感謝を欠かすことはできません。とりわけ、皆さんを一番近くで支えてくださっているお父さんお母さんへの感謝を忘れてはいけません。親御さんへの「感謝」の気持ちが、きっと皆さんを強くし、困難に立ち向かう勇気を与えてくれるはずです。

三つ目は、命への感謝です。皆さんの命はかけがえのないものです。自分の命を大切に思うことは、自分を大切にすることです。そして、自分の命を大切に思う人は、周りの人の命も大切に思える人です。皆さんは、生まれてきたことが百点満点です。これからの人生、うまくいかないときもつらいときもあるでしょう。でもどんな時も、ありのままの自分を大切にすることを忘れないでほしい、授かった命への感謝を忘れないでほしいと思っています。

さあ、門出の時が近づいてきました。皆さんには、これからの人生を心豊かに歩んでほしいと願っています。お互い二度とない人生、焦らず、目的をもって進んでいきましょう。もし、つらいこと、悲しいことに耐え切れなくなったら、遠慮せずに亀崎小学校へいらっしゃい。みなさんの話を親身になって聞いてくれる先生が、亀崎小学校にはたくさんいます。

挨拶が遅くなってしまいました。子どもたちの門出を温かく見守ってくださっている保護者の皆様、本日は、誠にありがとうございました。コロナ禍の二年間、皆様のお力添えなしに乗り切ることはできませんでした。本当にありがとうございました。保護者の皆様に、心より感謝を申し上げ、私の式辞とさせていただきます。

表彰の記録

- 令和3年度半田市男女共同参画コンクール標語部門
小学生の部 優秀賞 岩田 明敏（5年）
- 中国徐州市児童書画作品展
正岡 瑠愛（5年）黒岩 萌音（5年）石川 陽咲（5年）秋田 陽彩（6年）
榊原 杏（6年）早川いちか（6年）

♣ 子育てアラカルト ♣

[子育てと人間関係の4つの基本姿勢]

- 1 可能性を信頼し、人間としての畏敬の念をもっている
- 2 対等に触れ合う
- 3 人は、誰かに自分を聞いてもらいたいものだ
- 4 一人一人に出番を用意する

「4つの基本姿勢」を踏まえた上で、必要な「子ども、人間観」を4つあげてみよう。

①一人一人がかけがいの無い存在である。一人一人が異なっているから尊い。

ということだろう。誰にでも必ずよいところがあるはずだ。それを見つけるのが親の仕事だ。よいところがないと言うことは決してない。見つけられないだけだ。見方を変えること。必要以上に「比較」しないことも大切だ。次は、

②誰もが自分らしく生きたいと願っている。

③誰もが大きな可能性と成長する力をもっている。

ということだ。「子育て」は「個育て」だ。その子らしさを発揮できるように見守り、ともに育っていくのだ。そして

④人は他者との関係を通して成長することができる。

と言う子ども観だ。自分が目の前にいる子どもにどんな影響を与えているのかをしっかりと自覚することだ。笑顔で、明るい声かけをしているだろうか。その子と向き合って「他ならぬ君に向かって言っているんだよ」と言う姿勢だろうか。「君のことを見守っているよ」と伝えているだろうか。皮肉や嫌み、過去のことをくどくど言っているはいないだろうか。いいところを見つけると言えば、こんな話がある。

【エピソード】

映画監督の大林宣彦さんは、小学校の時、校長先生からおやつ炒り豆について「美味しそうなものから食べるか、それともまずそうなものから…」と質問を受けた。

宣彦少年は、豆はいつも美味しそうなものから食べた。－途中省略－

でも校長先生がお話の中でこんな質問をしたからには「まずそうなものから食べます」と答えなきゃいけないんだろうととっさに宣彦少年は考えた。美味しそうなものから食べる子はいやしい子、なんて言われそうな気もする。この時代、日本の子どもはいつも「いい子」であることを求められていた。そして、「いい子」とは、本音を隠して建前で言動できる子のことだった。

しかし、宣彦少年は、「美味しそうな豆から先に食べます」と正直に答えた。叱られるかなと思っていたが、意外なことに校長先生はうなずいて「そのほうがいいね。先生もそうするよ。だって、まずそうなものから…と考えながら食べていると、いつもまずそうなものばかり皿の中から探すことになるものね」とおっしゃった。「なるほど。そんなことを考えたこともなかったけど、そういうことになるのかなあ」と宣彦少年。「反対に美味しそうなものから思っていれば、いつも美味しそうなものを見つけて食べることになる。だから最後まで美味しいし、豆も喜ぶね」と校長先生。「ふうん。うまいこと言うもんだな」と感心した宣彦少年は、それから誰はばかりことなく、美味しそうな豆から食べるようになった。何を食するときだって、美味しそうなものから思っていると、いつも皿の中はおいしそうなものがあることになるんです。（上津淳一郎 著「読むクスリ23」）

人のあり方や生き方そのものにつながってきそうな話だ。短所や欠点ではなく、いいところに目を向ける、そんな人間でありたい。あなたはこれから、どちらから食べ始めるだろうか？

【心に刻む言葉】

子どもを楽観的にする方法は、たった一つ。それはほめることです。

（ある教育者のひとり言 より）